



「わかっている」ことを説明しようとすると言葉に詰まり、実は「わかっているつもり」だったことに気付く。もちろん「わかっているつもり」でも大人になれるし、生活はできるだろう。しかし、それでよいのだろうか?

この社会の全てを「わかる」ことは難しいが、大人になる前に、知ってほしい・考えてほしいテーマを掲げた。読みやすいものを選んでみたので、ぜひチャレンジしてほしい。

### 「戦争」を自分事に

『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか?』  
アレン・ネルソン／著 講談社 Y936

衝撃の題名は、戦地から帰国後、体験を話したネルソンさんに、少女がした質問である。彼は迷った末「Yes.」と答えた。  
戦争にあこがれ、貧困と人種差別から逃げ出すために兵士になった彼は、軍隊で洗脳され、実践を重ねるうちに、人を殺すことの罪を感じなくなっていった。  
実体験の描写から、戦争とは国対国ではなく、人対人であり「戦争＝殺人」であることを思い知らされる。戦争を身近に感じる、読むべき1冊である。(担当T)

『ヒットラーのむすめ』  
ジャッキー・フレンチ／作 さくまゆみこ／訳 鈴木出版 Y933

あなたがもし、ヒットラーの娘(息子)だったらどうしますか。「戦争をやめて」と言えたでしょうか。  
もし、誰かがヒットラーと同じようなことをしたら?もし、多くの人がある人のことを正しいと信じて、でも自分はその人が間違っていると思っていたら?もし、自分が正しいと思っていたことが間違っていたら?あなたはどうする?  
歴史の中の話ではない。今のあなたの答えを出そう。(担当T)

### 国境を越えて生きるということ

『はるかな旅の向こうに』  
エリザベス・レアード／作 石谷尚子／訳 評論社 Y933

ある日突然、ぼくは難民になった…。

少年・オマルは、シリアで平穏に暮らしていた。しかし、内戦が始まったことにより、一家は国外への脱出を余儀なくされる。苦勞の果てに隣国の難民キャンプにたどり着くが…。

これは昔の話ではなく、今まさに中東で起きていることだ。世界の問題に目を向け、どうか、そこに生きる人々に思いを馳せてみてほしい。(担当O)

『私、日本に住んでいます』  
スベンドリニ・カクチ／著 岩波書店 Y334

今、日本には多くの外国人が住んでいる。仕事や勉強のためという人もいるし、落語が好きだからという人もいる。そして…難民として、国を離れなければならなかった人も。

日本に住む12人の外国にルーツのある人が、日本と自分自身について語る。

“多文化共生”って難しく考えずに、隣にいる彼らのことが知りたい、友達になりたい、そんな気持ちになる本です。(担当O)

### 選挙の切り口はチョコレート!

『チョコレート・アンダーグラウンド』  
アレックス・シアラー／著 金原瑞人／訳 求龍堂 933

選挙とチョコレートって関係あるの?あるんです!

国民が選挙で選んだ健全健康党が、国民の健康を守るためにチョコレート禁止法を発令。チョコレートをはじめとする甘いお菓子は全て禁止された。真に国民が望むことは?正義とは?自由とは?二人の少年が、社会に立ち向かう壮快ストーリー!

チョコレート片手においしく楽しく読んで考えてみてはいかがでしょう?(担当T)

## パラリンピックの前に読もう!

『サッカーボールの音が聞こえる』  
平山譲／著 新潮社 Y916

緑内障で失明し、絶望の底にいた石井宏幸。そんな彼が希望を見出したのは、鈴が入ったボールを追うブラインドサッカーだった。ぶつかる恐怖を乗り越えて、日本代表に選出される。

努力する人は輝いていてカッコいい。選手の生き様・想いを知ればスポーツ観戦の楽しさ倍増まちがいなし! (担当T)

『伴走者たち 障害のあるランナーをささえる』  
星野恭子／著 大日本図書 Y369

「伴走」とは、一人では走ることが難しい人をサポートしながら走ること。例えば、目が見えない人のマラソンは、伴走者が道案内をして、ロープを握り合せて、一緒に走ります。多くの困難を乗り越えて、長距離を走り続けるランナー、そしてそれをサポートする伴走者…。

苦しみや喜びを分かち合う姿に、「伴走」の世界にひきこまれます。走ることが苦手な人も是非読んでみてください。(担当I)

## イスラムに学ぶ

『青いチューリップ』  
新藤悦子／作 講談社 Y913

舞台は16世紀のオスマントルコ帝国。田舎の村の羊飼いの少年・ネフィは、旅人バロの助言をきっかけに、学者に青いチューリップの球根を渡すために、都へ旅に出た。青いチューリップは、当時の帝であるスルタンをはじめとして、多くの人を魅了していた。やがてネフィはこの花をめぐる、多くの事件に巻き込まれていく。キャラバンに参加した少年の旅路や、作中のイスラム文化、チューリップの歴史など、読みどころたくさん作品です。(担当I)

『となりのイスラム 世界の3人に1人がイスラム教徒になる時代』  
内藤正典／著 ミシマ社 Y167

イスラム過激派や自爆テロなど、昨今のニュースから欧米の国と中東の国は対立していて、イスラムは怖いというイメージを持つ人もいるかもしれません。

しかし、そんな人こそ、この本を手にとってください。イスラム研究者の著者が、交流のあるイスラムの人達とのエピソードを紹介しながら、多くの日本人が気になっているイスラム教についてのことをやさしく解説しています。日本にはない考え方や知恵を学べると思います。(担当I)

『モスクへおいでよ』  
瀧井宏臣／著 小峰書店 Y167

イスラム教徒が礼拝をする場所であるモスク。遠い世界のこのようだけど、気軽に見学できるモスクが東京の渋谷区にあります。そのモスク「東京ジャーミイ」のスタッフで、イスラム教徒である下山茂さん取材したノンフィクション作品。本を読み、モスクに行き、異国の美しい建物や、素晴らしい文化にふれてみよう。(担当I)

## LGBT 自分が自分であること

『顔のない男』  
イザベル・ホランド／作  
片岡しのぶ／訳 富山房 Y933

「ぼく、先生がとっても好きです」

14歳の夏、意地悪な姉との同居に嫌気がさしたぼくは、寄宿学校の入学試験のため「顔のない男」に勉強を教わることになる。無口でぶっきらぼうな彼に反発を覚えながらも、次第に彼はかけがえのない存在になって…。

少年の恋の芽生えを瑞々しく描く。(担当O)

『スカートはかなきゃダメですか?』  
名取寛人／著 理論社 Y769

ずっと、男の子になりたかった…。

女性として生まれ、男性の心を持った名取さん。中学時代はスカートをはかずにジャージで登校し、女の子からモテモテ。しかし、内面では男性になれない自分に悩んでいた。そんな中、ダンスに出会い、そしてアメリカの男性だけのバレエ団「トロカデロ」に入団することに! 性別を越えて自分らしく明るく生きる姿に勇気づけられる。(担当O)